

2026 青森県生協連新春セミナー開催報告

1. 日 時 2026年1月21日(水) 13:20~16:15

2. 場 所 青森県観光物産館アスパム 5階 白鳥
ハイブリッド開催

3. 参 加 59名

コープあおもり（16名）青森県民生協（11名）

青森保健生協（7名）青森県庁生協（5名）

津軽保健生協（4名）県労済生協（4名）

弘大生協（1名）信用生協（1名）

県連事務局・たすけあいの会（5名）

日本生協連（3名）

講師（2名）

会場参加：41名

WEB参加：18名

4. 当日プログラム

2026 青森県生協連新春セミナー

2026年1月21日(水)13:20~16:15

青森県観光物産館アスパム 5階 白鳥

(ハイブリッド開催)

基調講演

少子高齢化・人口減少の中での地域づくり
～地域に根ざした実践の可能性～

青森大学 社会学部教授 柏谷 至 氏

実践報告

七和まちづくりネットワークの挑戦

七和まちづくりネットワーク専務理事 飛嶋 献氏



「安心してくらし続けられる地域共生社会づくりをめざし、人口減少・高齢化が続く地域の中で生協がどのような役割をはたしていけば良いかを考えうため、県内の優れた地域づくりの実践と生協の取り組みに学びましょう。」

七和まちづくりネットワーク（五所川原）は前身の「七和地区活性化協議会」で、買い物支援の取り組みで県民生協と連携し移動販売を試行、総務省の助成事業終了後は県民生協による地域貢献事業として現在に引き継がれています。地域の交流、見守り生きがいづくり（県民生協と連携したご近所野菜等）、青森大学との連携による地域の林地・農地の管理代行など多様な取り組みを行ない、令和3年には「あおもり地域共生社会表彰最優秀賞（青森県）」を受賞しています。



「七和楽々号」でお買い物する住民

主催 青森県生活協同組合連合会 017-766-1521

プログラム

- | | | |
|-------|---|-----------------------------------|
| 13:20 | 開会挨拶 | 青森県生活協同組合連合会 会長 菅原 正 |
| 13:25 | 基調講演 | 青森大学 社会学部教授 柏谷 至 氏 |
| 14:25 | 実践報告 | 七和まちづくりネットワーク専務理事 飛嶋 献 氏
質疑・応答 |
| 15:00 | 休憩 | |
| 15:15 | 会員生協報告 | |
| | ●「ここで暮らし続けたい」を支える仕組み・寄り添う心
～青森県民生協が挑むCX（顧客体験）～ | |
| | 青森県民生協 CX推進部次長 柳引 直恵 氏 | |
| | ●地域住民の交通手段としての 組合員バスの活用 | |
| | 青森保健生協 組織部次長 福士 学 氏 | |
| 15:45 | 質疑・応答 | |
| 16:05 | 閉会挨拶 | 青森県生活協同組合連合会 常務理事 嶋田 順一 |



5. 概要

2026年1月21日（水）、青森県観光物産館アスパム5階白鳥にて、2026青森県生協連新春セミナーを開催し、県内8生協、日本生協連、県生協連役職員より59名が参加しました。

6. 会長挨拶

菅原会長より、今新春セミナーのテーマ紹介に続き、「宅配や店舗、医療といった生協が営む事業を中心に、より多くの人と地域に寄り添える生協をめざして、生活インフラとしての強靭性をどのように高め、持続可能な地域づくりに貢献できる組織にしていくための課題は何なのか、皆で考え合い、そこからの気づきが次に踏み出す一步のきっかけになればと思います。」との主催者挨拶があった。



7. 基調講演

青森大学社会学部教授柏谷至氏より「少子高齢化・人口減少の中での



地域づくり～地域にねざした実践の可能性」と題して講演いただいた。

柏谷氏は現在五所川原市七和地区で「七和薪循環プロジェクト」を学生と共に実践中。講演では、①「人口減少」「少子高齢化」の実際、②「地域」から発想する人口減少対策、③生協に期待することについてお話をいただいた。

■人口減少・少子高齢化を「ひきうける」

人口変動は自然増減（出生・死亡）+社会増減（転入・転出）によって起こり、「少子高齢化」は先進国が必ず通る道で、将来は安定人口に向う。社会増減は「東京一極集中」の弊害。人口減少とのつきあい方は甘い想定は禁物だが、過度に悲観しない。（少子高齢化・人口減少は「社会が豊かになった」結果）注意すべきは進行の速さ（対策で時間を稼ぎつつ、今までの成果を活かして備えることが大事）。

■地域から考える人口減少

中心市街、郊外住宅地、田園地域など地域のなりたちによって問題の現れ方もさまざま。年齢層別に見た人口の流入も違うので、それぞれの地域の実情と課題に合わせた対策が必要。

『田園回帰1%戦略』（藤山浩 2015）という著書で、人口の1%相当の定住者を毎年呼び込めば地域は存続できるという考えが紹介されている。小さな地域で考える、ターゲットとする年齢層を定める、域外に流出している消費分を地域内で調達し所得を毎年1%ずつ取り戻すという戦略。そのささやかな実践例が七和地区の森林資源を薪に加工して販売する「薪循環プロジェクト」。温暖化対策、里山の維持管理、販売（ゆくゆくは雇用創出？）、地域経済循環の再構築+教育の場として、とその意義は大きい。

■生協に期待するもの

1. 非営利で稼ぐ（協同組合の精神）長い間の経験があることが心強い
2. 「地域の拠点」として、生活者のニーズを把握しトータルでサポートできる存在
3. 「地消地産」（地域で必要とされているものを地域内でつくる）の実現を期待
 - 経済の「漏れ穴」（域外にお金が流出している食料品とエネルギー等）をふさぐ
 - LB（ローカルブランド）の実践を生協に期待

8. 実践報告

五所川原市七和まちづくりネットワーク専務理事飛嶋献氏より「七和まちづくりネットワークの挑戦」と題して、実践報告をしていただいた。



人口減少により産業活動が低迷し、お祭り、小学校、ATMがなくなるなど地域活力が低下し、閉塞感が広がるという悪循環から、新たな信頼関係づくり、ネットワークの構築、事業実施による雇用増、地域の希望創出という好循環の実現をめざした。事業主体となったのは、地域のちょっとしたお困りごとを何とかしようと平成24年に誕生した「くらしの応援隊」。

平成26年度から県や国のモデル事業として「各集落が一体となって安心してくらせる地域コミュニティ」をめざし、①拠点づくり②助け合い③産業振興④普及啓発の事業に取り組み、その成果を引き継ぎ自立的な活動ができるよう、平成30年「七和まちづくりネットワーク」を立ち上げて今に至っている。

平成29年県生協連が検討委員会にオブザーバー参加したことをきっかけに、買い物難民対策について県民生協と協定を締結し、新城店より移動販売車を出してもらうことになった。更に

地元の農産物を新城店のご近所野菜コーナーで販売する活動を開始し、今も続いている。

「七和ビジョン 2020」を確認し、地域運営組織として「あおもり型農村 RMO」育成事業として、＊棒かけ自然乾燥米の真空パック商品の開発、＊鰐 come 祭りへの参加、＊七和収穫感謝祭

＊古民家・楠美家住宅でのジャズコンサートなどに取り組んできた。今後の課題として、①地域全体で子どもたちを育むために地域の小中学校との連携、②豊かな自然や文化を次世代に受け継ぐために、古民家・楠美家の指定管理への挑戦③自然乾燥米等の販売活動強化で活動資金（外貨）を獲得し地域の課題解決につなげる、という新しい挑戦に向かっている。

9. 会員生協報告

●青森県民生協 CX 推進部次長 櫛引直恵氏より、「ここで暮らし続けたい」を支える仕組み・寄り添う心～青森県民生協が挑む CX（顧客体験）～と題して実践報告があった。



・CX（顧客体験）とは、組合員に、生協と触れ合う全ての体験を通じて「生協があつてよかった」という深い信頼と感情を持っていただく事。組合員の満足が職員の誇りにつながり、地域からの支持を受ける事が盤石な経営基盤を築く。

・具体的な取り組みとして、①店舗利用者の認知症に対する現場の「戸惑い」を「安心」に変えるため、「認知症対応学習会」を開催 ②エフピコとの連携で「親子リサイクル教室」を開催し、分別の仕方の学びとリサイクルへの関心を醸成 ③「一人でできた」という一生の思い出と子どもの成長を支える場づくりとして「はじめてのおかいもののチャレンジ」を開催 ④自分のペースであせらず・ゆっくり・安心して精算できる「ゆっくりレジ」を導入 ⑤地域の不安を敏感に察知し、具体的な「備え」を提供した「クマ撃退スプレー＆ジェル販売」 ⑥暮らしの困りごとの一番近い相談相手としての取り組みとして「雪かき代行サービス」提供を開始、がある。
・理事長から発信された「基本理念」を軸に、「ここで暮らし続けたい」を支える仕組みをつくり地域住民に寄り添い、地域の活性化に貢献し、「生協があつてよかった」が溢れる青森をめざして CX を推進したい。

●青森保健生協組織部次長 福士学氏より、「地域住民の交通手段としての 組合員バスの活用」と題して実践報告があった。

・青森保健生協には 130 の班が年間 800 回以上の班会を開催しており、班が集まって 33 の支部が作られている。東郡地域にある 4 つの支部の 1 つが三厩支部。

・三厩地区は津軽半島の最北端に位置し、外ヶ浜町に属す。800 世帯人口約 1,400 人～1,500 人前後で高齢化率が高く、65 歳以上が 5 割を超える「限界集落」に近い状態の地区も多い。

・JR 津軽線の蟹田駅～三厩駅間は、2022 年 8 月の大雪で甚大な被害を受け運休中。復旧に数億円の費用がかかる一方利用者の減少が著しく、JR 東日本と沿線自治体との協議の結果、2027 年春に正式に廃止が決定。

・バスや乗り合いタクシーを組み合わせた新しい交通体系が 3 つの主なルートで整えられ、費用が約 1,170 円～約 3,500 円となっている。



・青森保健生協では組合員が利用できるバスを、2 コースで 1 週間に 17 本走らせ、診察・健康診断・お見舞い、買い物などに無料で利用できる

しくみがある。（組合員でなくても利用は可能）利用者には定期的な増資を呼びかけている。三厩地区から青森市に向かうバスも週 5 回運行し、非常に重要な移動手段となっており、バスコースに青森保健生協にない科目（整形や眼科）の医院が通過場所があることで、他院への受診にも活用されている。利用者からは感謝の言葉も寄せられている。

・年間で 18,000 人の利用があり、約 3000 万の経費をかけて、組合員の暮らしのお役立ちのために運行しているが、バス自体を知らない方も多いので更に周知したい。青森保健生協の重点

課題「誰もが健康で居心地よくくらせるまちづくりへの挑戦」の実現に向けて連携を強めたい。

10. 質疑・応答

第1部の基調講演と実践報告の後、及び第2部の会員生協報告の後に、質疑・応答を行い、多数の発言をいただいた。

11. 閉会の挨拶

嶋田常務理事より、柏谷教授の基調講演で少子高齢化・人口減少の中でも、生協ならではの地域に根ざした実践をしていくことで、安心して住み続けたいと思える地域づくりができる可能性を感じることができた。生協に期待いただいた内容については是非具体化を図っていきたい。七和とは移動販売の協定締結により連携が始まり、理事に着任いただいている飛嶋さんとのつながりもそこから始まっている。更に協力できることを進めたい。会員生協によるすばらしい活動の報告があり、生協間でもっと連携をすすめることで可能性が広がると感じた。「生協があつてよかったです」があふれる青森をめざして、共にがんばりましょう。との挨拶があった。



10. 感想より

- ・人口減少化の課題解決対策は、「小さな地域で考える」は腹落ちしました。県民生協としてもお店を地域インフラの拠点と考えその地域の課題解決に貢献しなければと思いました。
- ・①地消地産＝人口減少社会の中、青森としての地域価値を地域のお金で回す事で地域を活性化できる。②七和地区のチャレンジ育む、受け継ぐ、を地域で回している事がすばらしい。何とかしたい気持ちが地域を活性化しているので、参考にしたい。
- ・少子高齢化、人口減少の言葉を聞くたびにあきらめの言葉が出てきています。自分ができることができることがまわりにあるようなかすかな希望がみえてきました。小さな自分の生活範囲の中で私たちがここで暮らして良かったと思えるつながりができることも大切だと思いました。
- ・地域と生協の活動をつなげていきたいと思いました。地域とつながることが大事だと思います。
- ・組合員が何を欲しているかを知る、聞きとる姿勢が増々重要になっていると思う。組合員もどんどん声をあげていく事も、自分達がより良いサービスを受けられるようになると思う。
- ・「超・高齢社会」の今、医療・介護・福祉の側面から地域を支援する事の重要さを再認識できた。
- ・人口減少も心配なことですが、高齢化社会のことが心配です。高齢化により認知症の方が増えたり、移動が苦痛になったりしている現状をふまえて、移動販売車があればすごく助かる人がいっぱいいると感じています。青森市内にも欲しいです。
- ・各生協が連携すればいろいろなことが出来るのではないかと可能性を感じました。
- ・CXの基本理念と取り組み事例の報告があり、今後の生協のあり方が感じられた。
- ・県民生協の”CX”という理念の概要を知ることができた。保健生協の組合員バスが地域の交通



手段の要となっており、地域インフラを支えていることがわかった。

- ・今年より始めた「雪かき代行サービス」はとても良いと思う。福士さんのお話からは、交通手段が生活にとってとても大事で、そこを保健生協さんが支えているのはとても素晴らしい。